

山茶花



今年はエルニーニョの発生で、世界的に異常気象に見舞われているらしい。湿潤な南洋が乾燥して、山火事が途方もない規模で続いたり、何箇所地域は大雨で、濁流さかまく洪水の様子が時折回すBSの世界ニュースで報じられている。早々と何回もの台風に見舞われた割には今年の鹿児島は大した被害もなかったが珍しいほどの暖冬である。

庭と孟宗竹林の間の垣根に植えられた山茶花が、例年より早く咲き始めた。し字の角の一本だけは白い大輪の早咲きで、師走に入った頃は咲ききってしまっていた。列に並んだ紅色のものは何処にでも見かけるものだが、びっしりと蕾が付いて、散った花びらを根元に赤々と積み重ねながら、なお次々と花開いている。

この垣根の山茶花は今の位置に植えられて二度目の冬を迎えている。造園された三年前にはもっと南にあ

って竹林との界だったが、そこに牡丹園を作りたいと思ったので、翌春十メートル程左にずらしてもらった。それで奥の竹林との間が開かれて、かえって庭に奥行きが出た。

移された山茶花の垣は日当たりがよいのでその前が洗濯物干し場になっている。去年の早春、ふと気がつくとその葉は随分と虫が食っている。近寄ってよく見ると、葉の裏に爪楊枝ほどの太さで二センチほどの長さの薄草色の毛虫がすし詰めにビッシリ並んでいるではないか。ギョツとして殺虫剤を持ち出してシューッと掛けると、それが白く糸を引いて降るようにははらりと落ちて来る。まさに身の毛がよだつ思いだった。

また白く黴が生えたような枝や、泡の付いた枝もあり病気のだろうと思っていたが、そのせいか木に勢いが無く、その冬の花数は少なかった。

その年の夏、ある人を紹介されて、年に四回消毒薬を散布してもらった契約を結んだ。一年分前払いで庭の広さや樹木の量などで値段が決まる。安いのか高いのか見当もつかないし、殺虫剤は環境汚染の源のように思えて多少逡巡もしたのだったが、裸近くまで食

尽くす毛虫に、大輪の椿が枯れたこともあって、人のよさそつなその男を信頼してお任せすることとした。

聞くと思つていたものは全て虫だと言つ。外の玉石垣に植えられたユスの木の葉には、豆のよつな瘤があちこち付いていたがそれも虫だった。その消毒のおかげで庭の木々は元氣を取り戻した。

おかげで今年の山茶花は見事で、なぜか痛々しほど律儀に咲いている。あちこちに点在する椿も沢山の蕾をふくらませている。

それにしても近頃は山茶花を見かけることが多くなつた。故郷の信州は寒冷な山国であつたから、椿や山茶花は殆どなかつたし、昔は東京でも山茶花の垣根などこの頃ほどは見かけなかつたよつに思つ。やはり流行もあるのだろうか。

入来を通る幹線の国道328号は、年々整備されている。宮之城までの歩道と車道の間植えられた街路樹は、舶来の樹木かと思つ見慣れぬ木もあるが、それはそれでモダンな感じで明るい気分にはさせてくれる。昨年整備された入来町には、紅色の花水木が植えられて、春は清々しくも華やかな風情のだが、町はずれ

の入来峠に向かう山道には、丸く刈り込まれた山茶花が植えられた。私にはそれが何か不自然に思えて気に入らなかつた。山道なのだからもつと自然の風景にマッチしたものがよいのにと思つた。本当はススキがたなびいているのが似つかわしいが、植えるなら桜が自然だろつに、何で山茶花なんだろつと、抵抗を感じていた。それが今年はそのなかに気にならない。きっと枝葉が自然に伸びて周囲に溶け込んだのかも知れない。どうだつたか確認しなくてはと思つほど、抵抗なく通り過ぎていく。すっかり見馴れてしまつたと言つことなのだろうか。

東京の句会から十一月の兼題が「山茶花」だと伝えて来た。入来の句会や歌会でも山茶花を読んだものがちらほら見かけられる。この時期の庭に山茶花が無いとしたら本当に淋しいに違いない。

この所雨の日が多い。散り敷いた山茶花の紅に雨は無残でもあるが、また妙に艶めかしくもある。濡れた満開の山茶花の上から、また蕾の椿が負けじと身を乗り出している。